

『名古屋の観光力』書評

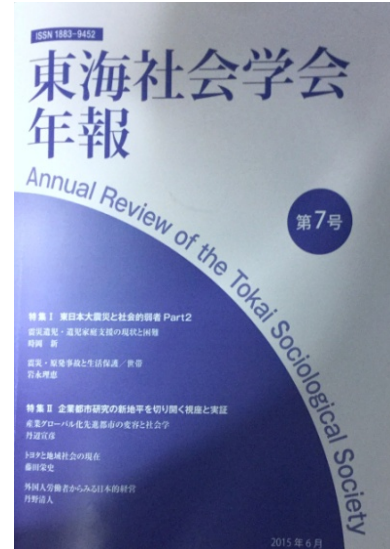
『東海社会学会年報』第7号(2015年6月)に、吉田一彦さんとの共編著『名古屋の観光力ー歴史・文化・まちづくりからのまなざし』(風媒社、2013年9月)の書評が掲載されている。年報編集委員会に献本しておいたので、書評を楽しみにしていた。評者は中日新聞社の岡村徹也さんで、東海社会学会理事をされている。先日の学会でお会いして、書評などについて話すことができた。

5ページにわたる長めの書評である。岡村さんは8本の論考を丁寧に紹介して「読者はこれらの論考から、名古屋にはいかに多くの歴史文化遺産があるのか、そして歴史文化遺産を中心としたネットワーク化と住民参加が、名古屋の観光力を高める鍵であることを理解できるであろう」と述べている。

「編者である山田明は本書のなかでアーリの『観光のまなざし』における諸概念を手がかりにして名古屋の観光に注目しているが、評者もアーリに引きつけて本書の議論を整理してみたい」とする。示唆に富むので、最後のところを紹介しておきたい。

「アーリの『観光のまなざし』の議論にしたがえば、まなざしが集中するということは多くの人を訪れるということである。それは名古屋によってしつらえられた空間がその構成において観光者を意識し、テーマに沿って人を呼び込む努力をあらかじめ含んでいることを意味する。現在の名古屋の観光に関して言えば、名古屋城の整備をはじめ、さまざまに手を尽くしている。

しかしながら、観光者はそうした『表象空間としての名古屋の良き理解者』になっていないのが現状である。アーリは観光における『教養』と『娯楽』の関係にも注目している。アーリ自身は『教養観光』の発展を示唆するとどまっているが、『名古屋の観光力』は、名古屋には観光都市と呼ぶにふさわしい観光資源が豊富にあること、すぐれた歴史文化資産があることを認識し、名古屋の観光がそれら資源を用いてある種の『教養観光』へと発展するための、そして観光者を『表象空間としての名古屋の良き理解者』へと変えていくための具体的な方策を考えるための一助となるであろう。」



(2015年7月11日)